

「トパス卿の話」の言語とスキーマの多次元構造 —中尾（2018）再考—

中尾 佳行*

The Language of *Sir Thopas* and Its Multidimensional Schematization:
Nakao (2018) Reconsidered

Yoshiyuki NAKAO*

ABSTRACT

This research note is made to reconsider Nakao (2018) with special reference to three focal points. 1) How is the schema “diminution” in *Sir Thopas* made multidimensional, in other words, why can the schema in the first dimension be restructured as the prototype for the second dimension, etc. 2) How much is the reader involved in the circular interpretations between the textual elements. 3) To what extent are the described contents regarded as true or are they generalized as true or subjectivised due to individuals? And how are they represented linguistically. These points have been hinted at by students, scholars and readers in my lectures, conference presentation and personal correspondences since publishing Nakao (2018). Taking them into full consideration, here I give some tentative answers to them: 1) The schema in the first dimension can be restructured as the prototype for the second dimension through the active interaction between metaphor and metonymy. This applies to the second and third dimensions; 2) The author leaves some lapses in the text for the reader to fill in, encouraging him or her via the schema to make circular interpretations between the textual elements; 3) The scarcity of punctuations in the manuscripts tend to bring about ambiguities of whether the speech representations of sir Thopas’s experiences are interpreted as generalized or peculiar to him.

キーワード：「トパス卿の話」、スキーマ、多次元構造、循環性、真実性、
読者

1. はじめに

1.1. 本研究ノートの背景と目的

『カンタベリー物語』（*The Canterbury Tales*）の一つ、巡礼者の一人であるチョーサー（Geoffrey Chaucer）自身が語る「トパス卿の話」（*The Tale of Sir Thopas*、以降「トパス卿」）は、ジャンルの面ではロマンズである。ロマンズでは通例主人公は恋と冒険を通してそ

*大学教育センター教授

の社会的・道徳的価値を広げていく。それに対しチョーサーが語り手である「トパス卿」は、恋と冒険は試しはするものの胡散霧散、伝統からは大きく逸脱、主人公はその社会的・道徳的価値をすり減らしていく。これまで「トパス卿」はロマンスのパロディとして扱われてきた。しかし、パロディでは言い尽くせない、円熟した詩人の言語的力量が伏せられている。中尾（2018）はこれまでの研究が独立的で統一性に欠けることを指摘し、「縮減」を本作品に通底する原理、認知言語学の用語で言えば、スキーマ（schema）と見なし、テキストとその意味の関係性を統一的に記述・説明、同時にスキーマを設定して初めて観察可能となる事実を発掘した。

中尾（2018）の発行後に行った同著書を教材とした集中講義（放送大学広島学習センター1学期面接授業（「チョーサー（Geoffrey Chaucer 1343?-1400）が語る「トパス卿の話」再考」、2018年6月30日～7月1日）、中尾（2018）におけるスキーマの多次元性を見直した学会発表（発表題目：「トパス卿の話」の言語とスキーマの多次元構造、日本中世英語英文学会第34回全国大会、於 愛知教育大学、2018年12月2日）、また読者からの私信において、研究内容の本質に関わる質問と有益な指摘を受けた。それらはいずれも自分の思考を広げ、深めてくれるものであった。本研究ノートでは再考点を3点に絞って紹介し、今後の研究への足がかりとしたい。中尾（2018）との重複はできるだけ避けるが、既存と再考を対比する関係上、最低限取り扱うことを断っておく。

1.2. 「トパス卿の話」と「縮減」のスキーマ

「トパス卿の話」は、チョーサー自らが語り手の、14世紀末東中部地方で流布していたテイルライムロマンスに依拠した物語である。基本的には aabaab/aabccb の1連6行、aa ないし cc のカプレットに尾韻 b が続き、8音節4強勢のカプレットから6音節・3強勢の尾韻へと漸減していく詩型である。3つの断章（Fit）からなり、トータルで207行、中途破綻した作品である。主人公のトパス卿は、フランダース、ポペリングの出身、ある時夢を見て妖精の女王が恋人であると決め付け、彼女を探る冒険に出る。彼女がいると思われる森に入ったところで、巨人オリファント卿の抵抗を受ける。とは言え両者とも直接戦うことは回避。トパス卿は鎧をまとして翌日に戦う約束をし、家に引き返す。彼の恋愛の対象、妖精の女王には会わずじまい。彼は“child Thopas”と呼ばれる（child は中英語では、「騎士」も「子ども」も表し、曖昧性がある）。ここまでが断章1である。断章2では、宴会をしたり、鎧をまったりと、（準備については）詳細に述べられる。断章3は、いよいよトパス卿が巨人オリファント卿との戦いに出陣。その冒険の途中、泉の水を飲んだ、というところで、宿の主人に「へボ詩」（doggerel Thop VII 925）と言われ、中途破綻。戦いは不発に終わる。

「縮減」は、物語のコンテンツ（トパス卿の出身地、彼の恋と冒険、彼の行動と心理）からその言い表し方（テイルライムの詩型、言語テキストのマクロ構造及びミクロ構造）まで通底し、その集中性は「縮減」を単に表現手段ではなく、それ自体を主題化の段階に推し進めている。

1.3. 中尾（2018）の再考

中尾（2018）では表1の3点を等閑視していたわけではないが、十分に意識的かつ丁寧に論じることはできなかった。本研究ノートはこの点の見直しである。

表 1：中尾（2018）の再考

再考	中尾（2018）の記述	本研究ノートでの見直し
1) スキーマの次元から別次元への接続をどう考えるか。	第一次元のスキーマが第二次元のプロトタイプに、第二次元のスキーマが第三次元のプロトタイプになることを記述・説明しなかった。	メタファーとメトニミーの推論を通して第一次元のスキーマが第二次元のプロトタイプ、第二次元のスキーマが第三次元のプロトタイプになり、接続・高次化することを記述・説明する。
2) テキスト構成要素間の循環性は、読者の介入ではないか。	フィクショナルスペースにおいて事態を認識する主体は大きく三分される。一番下に人物、中間に語り手（「トパス卿」では登場人物ではない語り手、つまり3人称語り手）、一番上に視点の転換装置“I”を設定。「転換」というのは、例えば、人物の立場に立つこともできれば、同時に離れて批判的に見ることもできること。循環性は視点の転換装置“I”を通して叙述。問題は、発信者（addresser）側を重視、受信者側（addressee）を軽視したことである。転換装置“I”を実質動かすのは読み手である。この“I”は書き手であり同時に読み手でもあることを十分に認識していなかった。	循環性は、ある特定テキスト構成要素を起点とし、視点の転換装置“I”とすり合せながら、読者が他の要素にどう繋げ、行き来するかの問題である。例えば、語の意味は、語単独に決まるのではなく、読者がスキーマを介して韻律構造、統語構造、更には談話構造と関係付け、どう再定義するか、その読みの分化と統合の問題である。読者の視点から循環性を捉え直す。
3) 中世における真実性の問題は、話法を通してどのように再現されるか。	事態は客観的にそのままにあるのではなく、主体（上記2）参照）を通して意義付けられる。本書は主体の分化を自明のこととして検証した。しかし、チョーサーが創作した中世社会では真実性の問題が根底にあり、コンテンツの権威故に、主体の分化が重視されない点を十分に考慮していなかった。この点、主体を分化すること自体が「縮減」のスキーマの一環にあることを認識していなかった。かくして人物の経験の再現法である話法の分析も不十分に終わった。	中世社会では、真実性の問題が重要で、権威あるコンテンツ（聖書、金言等）こそ意味があり、かくして誰が言おうと問題ではない、という志向性があった。つまり主体の関与は軽視された。しかし、チョーサーは、生身の人間としての経験、個別性を追究してもおり、この境界線上の位置が、スキーマの作用を微妙にし、かつその解釈幅を広げたと考えられる。この点は話法と表裏の関係にあることを再検討する。

2. スキーマの次元から別次元への接続をどう考えるか。

2.1. 「縮減」のスキーマ

スキーマは Langacker (2000)によれば、図1のように規定される。

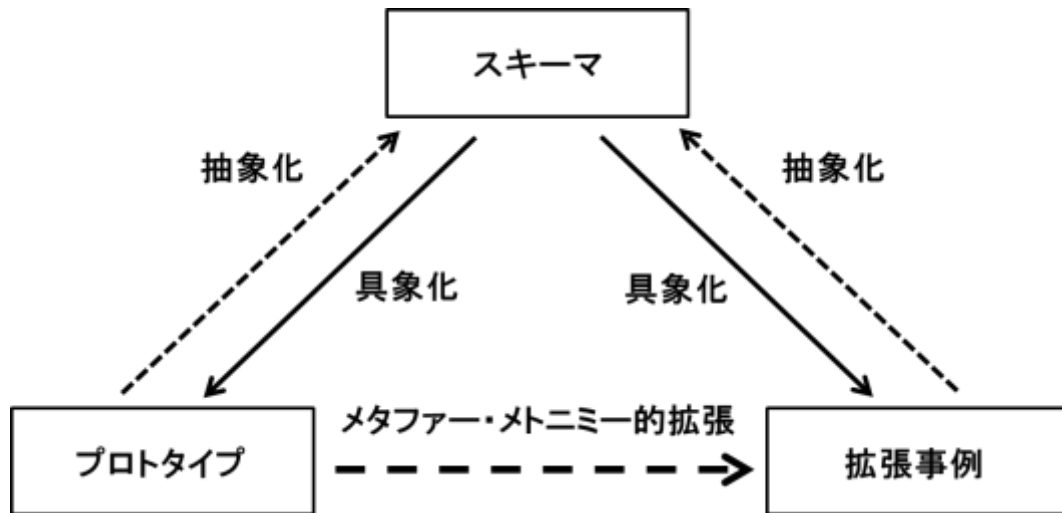


図1：スキーマ化と拡張

(Langacker (2000: 13)を修正した山梨 (2000: 181) に依拠。)

注：矢印の点線は抽象化、実線は具象化、破線はメタファー・メトニミーによる拡張。

スキーマ化は意味論の問題である。プロトタイプは、本論ではずらし (extension) の起点として設定し、歴史的に早いものから、遅いものへという、史的な流れに必ずしも即してはいない。イディオムの解体と再構築はその証左である。拡張事例はずらしの結果である。スキーマは、プロトタイプとずらしを統合する共通項である。「縮減」は縮減する前の状態、元があって初めて認識できるものである。

プロトタイプが「縮減」を通して拡張事例化する時、基本的には類似性 (縮減) に基づくメタファーと近接性 (中身と器、因果関係) によるメトニミーが使用される。注意すべきは、2.2で示すように、両推論は水平的だけでなく、垂直的にも作用している。

2.2. スキーマの多次元構造

プロトタイプのスキーマを介した拡張事例化は、図2に示すように、水平的のみならず、垂直的にも行われている。

中尾 (2018: 9-13) はスキーマの高次化を指摘したものの、それぞれの次元が推論を通してどのように繋がっていくかを十分に記述しなかった。つまり、記述的「縮減」A'が、第一次元のスキーマであり、同時に第二次元、表現模式的「縮減」のプロトタイプであるのは何故か、同様に第二次元のスキーマが第三次元のメタ言語的「縮減」のプロトタイプであるのは何故か。この点を再考する。

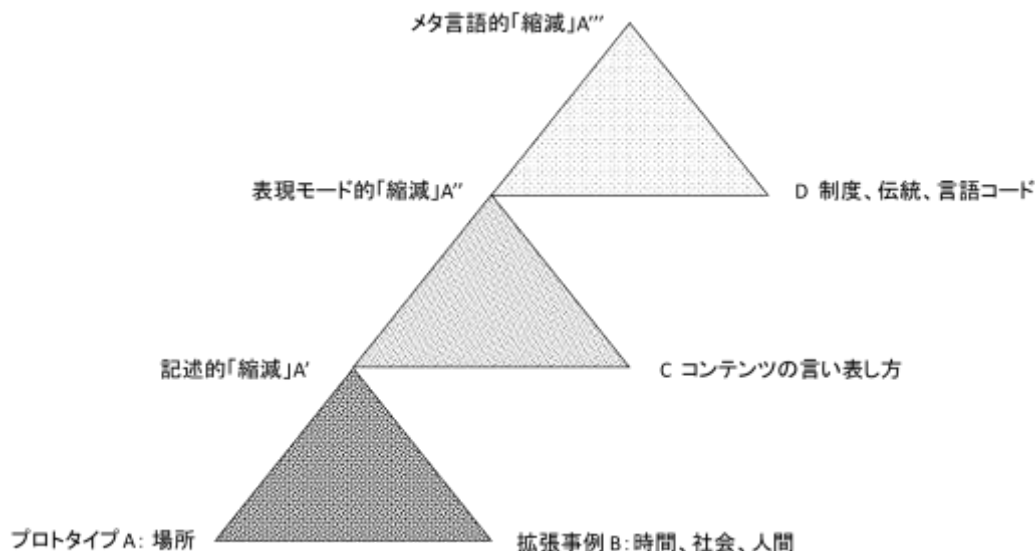


図 2：「縮減」（diminution）の三次元構造

「トパス卿」は、第一次元において、場所的縮減（彼の出身地は、海を遥かに超えてと期待させて、近場のフランダース、しかもその西端ポペリング（Poperyng）と狭められる）をプロトタイプとして、時間的縮減（古代から当代に近付ける：フランダースは当時絹織物産業でイングランドと争っていた）、社会的縮減（騎士階級と期待させて商人階級のような特性を混ぜる、騎士と期待させて子供のように振る舞わせる）、人間的縮減（筋骨たくましい騎士を期待させて、体は小さく、勇気も乏しい）へと拡張事例化する。そのコンテンツの全てに通底するスキーマが記述的「縮減」である。この記述的「縮減」がプロトタイプ（起点）となって、第二次元において、その理解の仕方を表す言語形式、表現モードに拡張事例化する。つまり中身が一貫して小さければそれを囲う器も一貫して小さい。＜小ささ＞はテキストのマクロレベルからミクロレベルへと拡張事例化している。このスキーマを表現模式的「縮減」とした。表現模式的「縮減」がプロトタイプとなって、第三次元において、既存のコードを揺さぶり、また柔軟に変容させ、システム自体に拡張事例化する。それらに通底するスキーマをメタ言語的「縮減」とした。

(1)は、トパス卿が妖精の女王を探して、その国に入り、そこには彼に敢えて挑戦する女、子供はいなかった、という場面である。

(1) Into his sadel he clamb anon,

And priketh over stile and stoon

An elf-queene for t'espys,

Til he so longe hath riden and goon

That he foond, in a pryve woon,

The contree of Fairye

So wilde; (下線は筆者)

For in that contree was ther noon

That to him durste ride or goon, → Hg MS、El MS では欠落

Neither wyf ne childe; Thop (The Tale of Sir Thopas), VII 797-806

(チャーサーのテキスト及び作品の略記名は Benson 1987 に拠る。)

childe は騎士と期待させて子供、この語の final -e は、通常の与格(前置詞の後の名詞)ではなく主格にずらして適用される。中身が小さければ、その器も小さい (final -e の規則性の弱体化)。<小さい>がパラレルに関係し、メタファーが機能、中身と器の関係性はメトニミーが機能している。この「縮減」の高次化を大胆に起こさせるのは、チャーサー創作時のロンドン英語の final -e が音的に喪失途上にあり、そのシステム自体の形骸化である。childe は第一次元の記述的「縮減」、第二次元の表現的「縮減」、そして第三次元のメタ言語的「縮減」へと高次的に連なっている。

「縮減」は次元を超えてメタファーとメトニミーが貫いている。表2に示すように、両推論は相乗的に作用している。

表2：メタファーとメトニミーの相乗効果

推論パターン	第一次元	第二次元	第三次元
メタファー：類似性 「縮減」が物理的次元から抽象的次元に適用される	コンテンツの「縮減」	コンテンツを表す言語形式の「縮減」	言語システムそのものの「縮減」
メトニミー：近接性 (中身と器の関係)が「縮減」の物理的次元から抽象的次元への移行を動機付ける	コンテンツの「縮減」	コンテンツのイレモノの「縮減」	コンテンツのイレモノを入れる更に大きなイレモノ、言語システムそのものの「縮減」

更に言えば、一端この三次元構造が確定すると、その運用は、下位の次元から上位の次元へ、また上位から下位へ、双方向的・循環的に行われる、と考えられる。

3. テキスト構成要素間の循環性は読者の介入ではないか。

2では、(1)の childe をベースに、スキーマの高次化がなぜまたどのように起こるかを再考した。本節では、この例をテキスト構成要素間の循環性の観点から見直してみよう。チャーサーは言い切っていない。言語表現に間(ま)を残し、聴衆・読者にその間を埋めていくように促している。つまりその意味付けの最終判断は聴衆・読者に委ねられる。中世という言論の自由のない時代故の自己防御とも言えるが、もっと修辭的で、事態の本質は“all or nothing”ではなく、むしろその割り切れなさにあることを示した可能性がある。口承伝達の読者はオンライン的に情報を処理し、音調や表情をヒントに聞いた瞬間に文意が分かることが要請される。ロマンスで一般的な語や句が多用されるのはこのこと故であろう。他方、チャーサーの写本の読みで、当該表現に立ち止り、遡及的にも進行的にも読み広げ、深めていくと、様々な表現と共鳴し合う。「縮減」のスキーマがダイナミックに動かされ、同じ語や句の再定義が促される。チャーサーの表現が親しみがあがり同時にリテラシーに厚みのある所以である。中世の聴衆・読者を明確に再建することは難しいが、一等最初の最も厳しいかつ想像力豊かな読者はチャーサー自身であったろう。フィクショナルスペースの最上位にいる視点の転換装置“I”は、この意味でも書き手が読み手と接する所以である。このような読者こそ最も創造的な読者と言えるだろう。

トパス卿に敢えて挑戦する相手を想定すると、childe の意味は、「騎士」、「将来の騎士」

(MED s.v. child 6: A youth of noble birth, esp. an aspirant to knighthood; also a knight or warrior) が自然であるが、ここでは「単なる子共」へと拡張事例化している。「トパス卿」では、テイルタイムの aabaab/aabccb、6行1連が基本パターンであるが、断章1の終わり部分では bob and wheel (bob は2音節1強勢、wheel は8音節4強勢のカプレットと6音節3強勢の尾韻)

を加え、韻律が乱れている。その *bob and wheel* のカプレットに対し短い尾韻行、その脚韻が *childe* である。小さい器・詩行に小さい中身・子供が織り込まれている。*child* に *final -e* が付加されている。チャーサーでは本来前置詞の後の名詞に限定され、与格として機能するが、主格の位置に拡大適用され、形態論的な拡張事例化として認識される。*final -e* の機能が「縮減」し、そこに中身としての「子供」である。この *final -e* の拡張事例化により、本来男性韻（強勢音節に終わる脚韻）になるべきところが女性韻（弱音節で終わる脚韻）に変更される。*childe* の連語として *wyf (woman)* が使われており、女性的な意義付けが添付される。この女性韻は、ボブの *wilde* と脚韻、そのチャイミング効果により、その意味が「縮減」、*wilde* は「荒野の荒々しい」から家庭的な近場での「馴らされていない」に再定義される。

更に、間テクスト的な (*intertextual*) レベルに文脈を広げて考えることも可能である。*childe* の脚韻語として、*wilde* の前に *milde* が想起されたかもしれない。*childe* と *milde* の脚韻パターンが口承的なロマンスにおいて頻用される。語彙の多様性の貧弱さ、そのため同じ語の繰り返しは、口承性に由来する。(2)に口承的なロマンスから脚韻例を挙げる。

(2) <Matter of England>

Eure heo bad for Horn child
pat Jesu Crist him beo myld. *King Horn* 79-80

He him apac to Horn child
Wordes þat were mild: *King Horn* 179-80

þenne sayde þat Eerl with herte mylde,
“My wyff goþ ryzt gret with chylde, *Athelston* 217-18

<Breton Lay>

Sche preyd to God and Maré mylde
Schuld gyffe hur grace to have a child, *Sir Gowther* 61-62

Scho seyde to hur lord, that lade myld
“Tonyght we mon geyt a child, *Sir Gowther* 79-80

The lady, þat was both meke and mylde,
Conceyued and wente wyth child, *Emare* 478-79

The lady, þat was meke and mylde,
In her arme she bar her chylde, *Emare* 640-41

That o knight made his levedi milde
That she was wonder gret with childe *Lai le Freine* 33-34

チャーサーは、*childe* を出して、そのフェローとして常套的な *milde* を間テクスト的に聴衆に想起させた可能性がある。*childe* とボブの *wilde* の間に *milde* を挟むことが、*wilde* とのチャイミングに弾みをつけ、*wilde* の意味を低落させる効果を発揮しているのではないか！。

「トパス卿の話」の読者は、少なくとも二つ考えられる。このロマンスに閉じられている読者と『カンタベリー物語』全体に開かれている読者である。前者の読者は、巡礼者の話の進行役で同時に評価者である宿の主人によって代表される。彼はチャーサーのロマンスを「へ

ボ詩」として中断させた。循環性のある読みは、彼には難しいであろう。

『カンタベリー物語』全体を見通し、批判的に読み解くことのできる聴衆・読者ではどうか。『カンタベリー物語』は、現代刊本のセットテキストのベースになっている EI MS では 10 の断章 (Fragment) からなり、「トパス卿の話」は断章 7 に含まれている。この断章はファブリオ、殉教伝、ロマンス、説教集、悲劇、アレゴリーからなり、ジャンルの相対化が行われている。テイルライムはロマンスのジャンルを際立てる詩型で、チャーサーでは唯一のものである。彼のロマンスは「騎士物語」に典型的であるように通常弱強 5 歩格 (iambic pentameter) のカプレットで語られる。文学の媒体である詩型そのものもがメタ認知されている。チャーサー自らがこのロマンスの語り手となり、その常套表現を露骨に踏襲、同時に茶化してもおり、彼の自己戯画性は最高潮に達している。読みの循環性は、宿の主人ではなく、この後者の読者にして可能であろう。

最後に写本の異同の問題を「縮減」のスキーマを通して見直してみたい。Neither wyf ne childe の直前のカプレット行 aa (8 音節・4 強勢) に注目する。この 2 番目の a (VII 805) は、初期写本、チャーサーのオリジナルに最も近いと考えられている Hg MS と EI MS には欠落している。Manly and Rickert (1940: Vol.4, p. 143)によれば、この行は現存写本では 8 写本にしか認められない: a 写本に属する Dd, En1, Ds1, Cn, Ma; Ln (a joins with other copies, Ln ... to form with ã)及び Ch, Ry1 (alternating between [better tradition 1] and [composite group 2])。この行は、a 写本の信頼性のある写本にあることから原典にはあったと想定される。これを挿入し、詩型を aac (c は本連での尾韻) と整えた方が、本作品のスキーマ、「縮減」(高め落とすパタン)を一層際立てる。勿論チャーサーが、口承の語り手のルースさをまねて、a ラインを意図的に落とし、詩型の「縮減」を引き起こしたという解釈も否定はできない。更には言えば、欠落行をたとえ補完しても、その脚韻語 goon は同一連でリッチライムを成し(同一連、同語の脚韻でチャーサーが避けている脚韻パタン)、これまた語り手の詩的力量的「縮減」に繋がる。やぶへびである。

Hg MS のレイアウトでは、VII 806 行の尾韻行“Neither wyf ne childe”が直前の a 行が欠落しているために、図 3 のように第 1 コラム (最も左のコラム、aa のカプレット行) に置かれている。本来は第 2 コラム (真ん中のコラム、尾韻行) に配置されるものである。

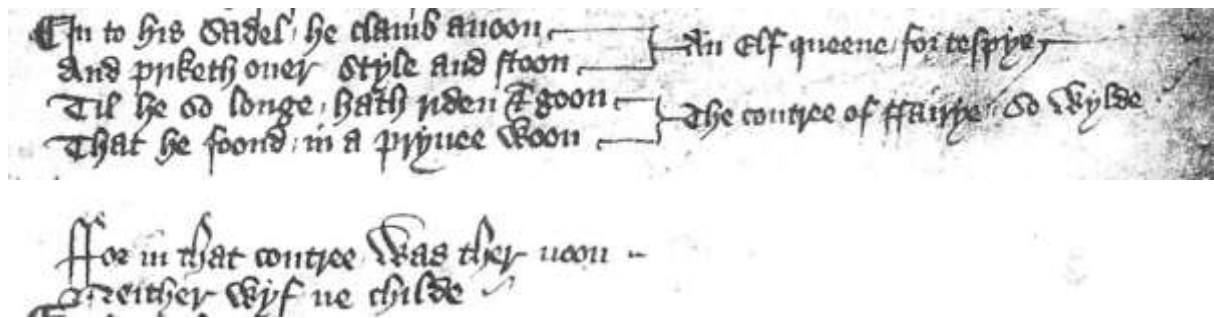


図 3: Hg (Hengwrt) MS, 214r-214v (Ruggiers 1979 に拠る。)

EL MS では、恐らくこのことに気付き、図 4 のように第 2 コラムと第 3 コラム(最も右のコラム、ボブ行)の間まで移動し、ボブの wilde と脚韻することを視覚化している。

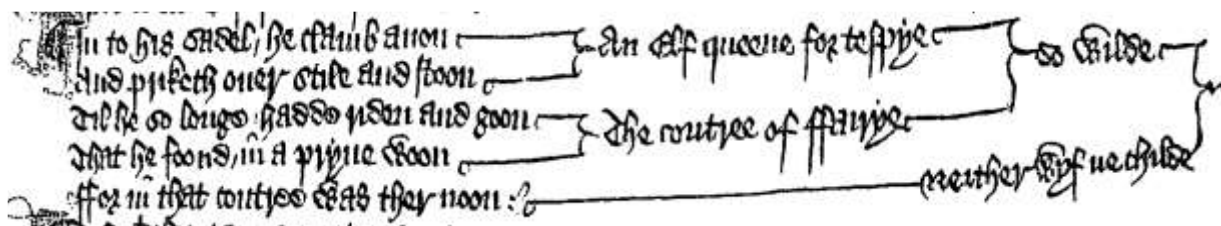


図 4: El (Ellesmere) MS, 152r (Hanna III 1989 に拠る。)

El MS は a ラインの欠落に気付いたものの、詩型の「縮減」として意図的に放置したのかもしれない。(Hg MS、El MS 両写本ともアダム・ピンクハースト (Adam Pinkhurst) が作成したことが Mooney (2006) によって発見された。)

4. 中世における真実性の問題は、話法を通してどのように再現されるか。

事象であれ、言語であれ、絶対的・固定的だと、スキーマ形成の動きは抑制される。他方、それが他の選択肢との関係で相対的に見直されると、スキーマ形成が活性化、価値が再定義される。中尾 (2018: 11) においてスキーマは「縮減」で、それはこの相対的認識から生起すると考えた。しかし、同書では中世での権威と経験の緊張関係、真実性の問題は本質的な問題であるにも拘わらず、十分に扱わなかった。真実性の問題は次のように二分して問われる。一方では、権威ある内容 (聖書、金言等)こそ重要で、主体の関与は問題にはならない。他方、生身の人間としての経験が問われると、主体の関与は重視される。チョーサーでは、両者の境界は必ずしも明確ではなく、権威とは言え元のままに一般論 (generic/gnomic) なのか、それとも主体の経験を通して相対化、つまり拡張事例化しているのか、微妙なグラデーションを生み出している²。(3)は、トパス卿が巨人オリファント卿との戦いを前に、鎧をまとい、彼との戦いを誓う場面である。

(3) His shield was al of gold so reed,

And therinne was a bores heed,

A charboacle bisyde;

And there he swoor on ale and breed

How that the geaunt shal be deed,

Bityde what bityde!

Manly and Rickert (1940):

[Se, Ad1, Bo1, En1, Gg, Ha3

Ph3, Py, Bw, c, En2, G1, Lc

Mc, N1, Ra2, Ra3, Ry1, Ht: shuld; Ox: wold]

VII 869-74 (Benson 1987)

他に、Robinson (1957), Baugh (1963), Pratt (1974), Fisher (1989)。

「巨人を殺してやる」(the geaunt shal be deed) は、主文の伝達動詞 swoor は過去形であるにも拘わらず、時制のバックシフトがなく現在時のままである。間接話法だが、トパス卿個人の決意を直接話法のように臨場的に示したのか。それとも現在形の中核的意味「時間の超越」(timeless) を活かして、語り手はそのような決意を騎士の属性として一般化したのか。ここには真実性の問題がある。次に「何が起ころうとも」(Bityde what bityde) は、まるでスピーチのような譲歩構文である³。この言葉の主体はトパス卿なのか、それとも語り手なのか。話し手の主体が変われば聞き手も違ってくる。トパス卿は宴会の場で身の回りの家臣に個人的に啖呵を切ったのか。しかし、談話的に見ると、戦いまで行き着かず、竜頭蛇尾である。それとも語り手が、トパス卿に対してこのような勇気をもって臨め、と激を飛ばしたのか、あるいは聴衆の誰かを見ながら、このような勇気があつてこそ騎士、と注意を喚起したのか。真実性の問題は、一般論なのか、主体によって個別化されているのか、曖昧性が残る。

Benson (1987)をはじめ多くの刊本は、現在形 *shal* を採用しているが、複数の写本が無標の過去形に書き換えている（語りは人物の過去の経験の再現で、直接語法を除けば過去形が無標である）。因みに、(3)の引用のマージンに示したように、写字生の書く行為においては、その心的距離故か、過去形に書き換えられる可能性が高い。

写本は、通常句読点で語り手の言葉か人物の言葉かを識別せず、その判断は読み手に委ねられる。(3)では刊本の多くも Benson (1987)同様に、地の文とスピーチを識別していない。しかし、Skeat は、(4)のように、*shal be* から *bityde* 最後までをシングル・クォーテーションでマークし、トパス卿のスピーチと見なしている。

(4) And there he swoor, on ale and breed,

How that ‘the geaunt *shal be deed*,

Bityde what bityde!’

VII 872-74

(Skeat 1894)

Pollard は、(5)のように、*Bityde* の譲歩文をシングル・クォーテーションでマークし、トパス卿のスピーチにしている。

(5) And there he swoor, on Ale and breed,

How that the geaunt *shal be deed*,

‘*Bityde what bityde!*’

VII 872-74

(Pollard 1898)

また Donaldson は、(6)のように、*shal be deed* と *Bityde* の間にダッシュを入れて、微妙な主体の切り替えをほのめかしている。

(6) And there he swoor on ale and breed

How that the geaunt *shal be deed*—

Bitide what betide.

VII 872-74

(Donaldson 1958, 1975)

このような編者の解釈差には、真実性の問題が絡んでいる。真実性が絶対的・固定的であれば主体が誰であれ問題は無い、語りと人物を識別する句読点にこだわる必要も無い。写本の句読点の未発達性はこのことに起因するのかもしれない。他方、真実性は絶対的・固定的でなく、主体が分化すると、誰が言ったかが重要となる。刊本では句読点で主体の解釈を明記するが、上述したように、その解釈に揺らぎがあることには注意を要する³。この点、写本は主体の曖昧性を残し、興味深い。真実性の「縮減」、つまり主体の揺らぎは、図5のようにまとめられる。

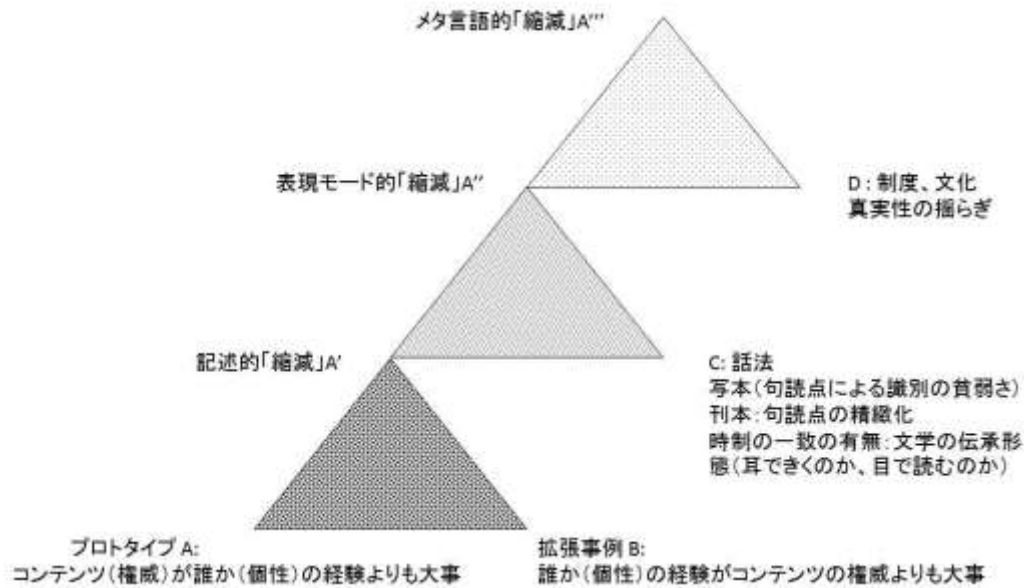


図 5： 真実性の「縮減」

5. おわりに

以上のことから上述の再考案、3点を次のようにまとめることができる。

- 1) トパス卿の属性、行動、心情は、繰り返し騎士の本道から後退し、第一次元の記述的「縮減」のスキーマが形成される。このスキーマを介して *childe* の語彙的意味は「騎士」から「子供」に拡張事例化する。「縮減」はこの次元に閉じられない。第一次元の最高点、記述的「縮減」のスキーマが、今度は第二次元の表現模式的「縮減」の出発点、プロトタイプとなって接続する。このスキーマを介してテキストはマクロレベルからミクロレベルまで拡張事例化する。中身が一貫して小さければそれを囲う器も一貫して小さい (*childe* の *final -e* が本来の与格から主格へ拡張事例化)。最後には第二次元の最高点、表現模式的「縮減」が、第三次元のメタ言語的「縮減」のプロトタイプとなって接続する。このスキーマを介して既存のコードは揺さぶられ、柔軟に変容、システム自体が拡張事例化する。チャーサー創作時 *final -e* の発音は弱められ、その機能は形態化していた。スキーマの高次化が一端確定すると、その使用は下から上に、また上から下にと、双方向的に行われたと考えられる。スキーマの高次化は、メタファーとメトニミーの相乗効果を通して円滑かつ積極的に推し進められている。
- 2) チャーサーは言い切っていない。テキスト上に間(ま)を残している(語の意味幅、形態論的な誤用、韻律の選択等)。視点の転換装置“*I*”が書き手でもあり同時に読み手でもある所以である。読者がその間を埋めていくことでテキストの意味の全体像が生み出される。宿の主人はチャーサーのロマンスを「ヘボ詩」として切り捨てるが、テキストの一面的な読みには閉じられている。テキスト要素間の循環性は、『カンタベリー物語』全体を見通して、読みを切り替えていく開かれた読者にして可能である。
- 3) 中世における真実性の問題は話法の解釈と表裏の関係にある。時制の一致が欠如し、あるいはスピーチの要素があるにも拘わらず、写本上句読点で明示されていない。事態の真実性が一般論なのか、個別的なのか微妙な境界線に置かれている。「縮減」は一般論の個別化に作用していく。

今後はスキーマ理論の立場から「トパス卿の話」から『カンタベリー物語』全体、更にはチャーサーの間テキスト性の問題(チャーサーの他作品及び彼の創作に影響を与えた中世の他作家の作品との比較)にも広げ、検討を続けていきたい。

注

1. 西村秀夫氏（三重大学教授）から口承的ロマンスの語彙特徴（語彙数が少なく同じ語を頻繁に繰り返すこと）と脚韻パターン（脚韻パターンのヴァリエーションが少ないこと）について、貴重なコメントと示唆を得た。ここに記して感謝したい。
2. 真実性の問題は、主観性（subjectivity）の問題でもある。認知的に言えば、主観と主観が重なり合う間主観的な状況が客観的な状況と捉えられる。チョーサーの場合、主観の共有項は、「トパス卿の話」の中断後、仕切り直しをするもう一つの話、「メリベーの話」において聖人や賢人の英知に、また『カンタベリー物語』の最後の話「教区牧師の話」では聖書の権威に求められている。金言は通例その権威(者)を明記し、直接話法でハイライトされている。金言が間接話法や語り手の地の文に取り込まれる時、人物の主観を通してなのか、一般論なのか曖昧性が生じている。

「メリベーの話」

Wherefore Tullius seith, “Amonges alle the pestilences that been in freendshipe the gretteste is flaterie.” And therefore is it moore nede that thou eschue and drede flatereres than any oother peple. / Mel (The Tale of Melibee) VII 1176

For Senec seith that “the wise man that dredeth harmes, eschueth harmes, / Mel VII 1320

“... And Salomon seith, ‘He that hath over-hard an herte, atte laste he shal myshappe and mystyde.’” / Mel VII 1696

メリベー（Melibee）は娘ソフィア（Sophia）が暴漢に襲われ大けがをし、その復讐を誓うが、妻のプルーデンス（Prudence）は多くの賢者の英知を引用し、それを思い留まるように説く。しかし、その引用にも拘わらず、メリベーの気持ちは変わらない。何百もの金言を耳にしたにも拘わらず、メリベーに一言でうっちゃられる（Mel VII 1835）。にも拘わらずプルーデンスの不機嫌を感じると、すぐにも彼女に同意する。言葉の力の再定義という点で、「トパス卿」のスキーマと軌を一にする。

「教区牧師の話」

And God seith in the Apocalipse, “Remembreth yow fro whennes that ye been falle”; for biforn that tyme that ye synned, ye were the children of God and lymes of the regne of God; / ParsT (The Parson’s Tale) X 136

The seconde cause that oghte make a man to have desdeyn of synne is this: that, as seith Seint Peter, “whoso that dooth synne is thral of synne”; and synne put a man in greet thraldom. / ParsT X 142

For which God seith by the prophete Jeremye, “Thilke folk that me despisen shul been in despit” / ParsT X 189

「教区牧師の話」は、人間の7大罪とそれと対峙する徳目を説いた説教集である。

因みに、古英語文学においても真実性の問題は重要で、Klaeber は『ベオウルフ』（Beowulf）の編集において、スピーチは劇的な特性に欠け、儀式的な権威を重視していることを指摘している。

Klaeber (1950: lv): The major part of these [speeches] contain digressions, episodes, descriptions and reflections, and thus tend to delay the progress of the narrative. But even those which may be said to advance the action, are lacking in dramatic quality; they are characterized by eloquence and ceremonial dignity.

また Louviot も、古英語文学では主観性 (subjectivity) に欠けており、ヴィクトリア朝の文学のように心理的な深さがないと指摘している。

Louviot (2016: 103): It appears, then, that Old English poems are not mediated through the subjective lenses of a narrator or implied author, at least not in the usual sense, and that might very well account for the impression that Old English narratives lack subjectivity. It does not, however, explain why the speeches in Old English poetry also feel rather impersonal as compared with more modern literary speeches. Characters in Old English poetry may not have the psychological depth of their Victorian counterparts, for instance, but, unlike Old English poetic narrators, they are reasonably well-defined entities with a name and social status, among other attributes, so that what is true of narrators need not necessarily apply to them.

Louviot が真実性 (truth) について三分しているのは、方法論的に示唆的である。

Louviot (2016: 109): For Berrendonner, a statement may be posited as true in three different ways: S-true (true for the speaker), ϕ -true (true in the natural order of things, as part of reality) and PEOPLE-true, i.e. true for at least one other person than the speaker.

Louviot が指摘する話者と聴衆の理解の「共有」という指摘も注意に値する。

Louviot (2016: 173): The fact that the archetypes are presumably well known to the intended audience has important implications for reception. In a modern novel, the author is the sole possessor of the ‘truth’ concerning the characters (provided such a truth is to be had, which is not always the case). In an Old English poem, the audience is in a prime position to evaluate the ‘truth’ of the characters themselves: they share the same knowledge as the poet concerning the relevant paradigms and are therefore able to evaluate the characters and their interactions in terms of conformity or non-conformity to those norms.

3. Moore (2015: 167-68)は、中世の写本は句読点で直接話法と間接話法を識別しないことから、解釈に微妙な揺らぎが生ずることを指摘している。この箇所を引用しているが、刊本の句読点の異同は等閑視している。類例を挙げておく。『カンタベリー物語』の「総序」(General Prologue)で、修道僧の紹介をしている場面である。“How shal the world be served?”は、修道僧の心の声なのか、語り手が同調し、地の文で一般化したものか、曖昧である。
- What sholde he studie and make hymselfen wood,
Upon a book in cloystre alwey to poure,
Or swynken with his handes, and laboure,
As Austyn bit? How shal the world be served?
Lat Austyn have his swynk to hym reserved!
Therefore he was a prikasour aright: GP (General Prologue) A 184-89

参考文献

- Baugh, A. C. ed. 1963. *Chaucer's Major Poetry*. Englewood, New Jersey: Prentice Hall.
Benson, Larry D. ed. 1987. *The Riverside Chaucer: Third Edition Based on The Works of*

- Geoffrey Chaucer Edited by F. N. Robinson*. Boston: Houghton Mifflin Company.
- Donaldson, E. T. ed. 1975. *Chaucer's Poetry: An Anthology for the Modern Reader*. New York: The Ronald Press Company.
- Fisher, J. H. ed. 1989. *The Complete Poetry and Prose of Geoffrey Chaucer*. 2nd. edn. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- French, W. H. and C. B. Hale. eds. 1960 (orig. publ. 1930). *Middle English Metrical Romances* (Two Volumes bound as one volume I). New York: Russell and Russell. [*King Horn, Emare*]
- Hanna III, R. intro. 1989. *The Ellesmere Manuscript of Chaucer's Canterbury Tales: A Working Facsimile*. Cambridge: D.S. Brewer.
- Klaeber, Fr. 1950. *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, 3rd edn. Boston: D. C. Heath.
- Kurath, H., S. M. Kuhn, and R. E. Lewis. eds. 1952--2001. *Middle English Dictionary*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Langacker, R. W. 2000. "A Dynamic Usage-based Model." In Barlow, Michael & Suzanne Kemmer eds. *Usage-Based Models of Language*. Stanford: CSLI Publications.
- Louviot, E. 2016. *Direct Speeches in Beowulf and Other Old English Narrative Poems*. Cambridge: D. S. Brewer.
- Manly, J.M. & E. Rickert. eds. 1940. *The Text of the Canterbury Tales: Studied on the Basis of All Known Manuscripts*, 8 Vols. Chicago & London: The University of Chicago Press.
- Mills, M. ed. 1973. *Six Middle English: Romances*. London: Everyman's Library.
- Mooney, L. 2006. "Chaucer's Scribe". *Speculum*, Vol. 81, No.1, 97-138.
- Moore, C. 2015. *Quoting Speech in Early English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 中尾佳行. 2018. 『チョーサーの言語と認知—「トパス卿の話」の言語とスキーマの多次元構造—』 広島：溪水社.
- Pollard A. W. et al. eds. 1898. (The Globe Edition) *The Works of Geoffrey Chaucer* (rpt). London: Macmillan.
- Robinson, R. N. ed. 1957. *The Works of Geoffrey Chaucer*. London: Oxford University Press.
- Ruggiers, P. G. ed. 1979. *The Canterbury Tales: A Facsimile and Transcription of the Hengwrt Manuscript, with Variants from the Ellesmere Manuscript*. Oklahoma: University of Oklahoma Press.
- Sands, D. B. 1986. *Middle English Verse Romances*. Exeter: University of Exeter.
- Simpson, J. A. and E. S. C. Weiner. eds. 1989. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Clarendon Press.
- Skeat, W. W. ed. 1900. *The Complete Works of Geoffrey Volume IV The Canterbury Tales*. Oxford: Oxford University Press.